

# 「相手に耳を傾けること

人文学部 平岡あづささん(平成 25 年 3 月卒業)

## ★「ぶつからない」という選択肢は無かった

私は2年生のときに横浜へ行き、3月から8月までの約半年間、インターンシップを体験した。若気の至りか、「都会とは、社会とは何かを知る」という大雑把な目標を持って横浜へ引っ越した。環境が変わったからといって自分自身がすっかり変わるというわけではなかったが、インターン先のメガネ屋で、挑戦することやその結果失敗することは、たとえ恥をかいたとしても価値のあるものだと言った。インターン開始当初は、うまく接客できない、スタッフと上手く付き合っていけない。そんな悩みや、今までに見たことのないデキる人たちの存在を目の当たりにしたことで劣等感に苦しみ、自分が大嫌いにもなった。しかし、自分でインターンに飛び込んだ以上、常に挑戦し続けなければならなかった。そしてそういう環境だったことが、悩んで立ち止まるというのを防いでくれた。ぶつかって成功するか、ぶつかって玉砕するか、道が2つしか無くて、「ぶつからない」という選択肢のない半年間だった。

## ★歩み寄ったり、擦り合わせたり、時には主張を戦わせること

2年生の後期から、再び学生生活に戻った。そしてわたしは「コラパ〜」まつりという学生活動のメンバーになった。「コラパ〜」まつりの活動意義は、平たく言えば学生及び地域に良い影響を与えて高知を元気にすることだが、実は私は、地域に入り込んで何かしたいことがあったというわけではなかった。ただ、何かの活動に参加して仲間とともに一つのことをやり遂げたいと思う気持ちだけを持っていた。そのため不純な動機で潜り込んだ私には、少なからずメンバーや地域の方々に対して後ろめたさがあった。

気持ちの変化は大祭りの準備期間に訪れた。大祭りをを行うために、複数の地域に協力依頼を申し出ている。地域の方に協力依頼の電話をかけ、連絡を取り合った。すると、地域の協力者との間で、鍋の無償提供依頼や販売品やブースの大きさなど、あらゆることで意見の不一致が起こった。全く自分たちの希望通りにいかないことがあった。そのたびに、なぜ私たちは協働できないのだろうかと言をかしげた。悩んでミーティングを繰り返して、先生方からアドバイスもいただき、メンバーで代案を考える。そんなことを繰り返しているうち、地域とは何かを知らない自分に協働できるはずがないことに気が付いた。私は、地域の人々が何を望んでいるのかということを知らなかったし、考えられていなかった。私たちが行う「地域の活性化」は、本当に地域の人々が望んでいるのだろうかと言、疑問に感じるようになった。そしてそこから、「コラパ〜」まつりの活動を通じて地域の人の喜ぶ顔がみたいと思うようになった。そして「コラパ〜」まつりの活動目的と自分の行動意義がすこしずつ重なっていった。地域の婦人会の方の作るモーニングを食べに行った。田植えをしに行った。木の苗を植えに行った。地域のよさこいに参加した。初めは不純な動機で潜り込んでしまったと悩んでいたが、私も「コラパ〜」まつりで地域の魅力を知り、地域と協働して、そして少し成長している学生の内の一人だと思う。

「コラパ〜」まつりで活動することに、必ずしも理由は必要ではなかった。ただやってみようと思ったことを真面目にやっていると、思いがけないところから意味が見えてきた。自分の主張を受け入れてもらうことを重視するよりも、相手の主張を聞き、新しい手段や道を考えることの方が大切な時もあると知った。これから関わる職種や世界の違う人との出会いの中で、主張の違いや目的の違いで生じる問題に遭遇した時に、歩み寄ったり、擦り合わせたり、時には主張を戦わせることができるように、常に相手の主張に耳を傾けたいと思う。